

# 『現代 TOKYO 怖話』

—SideA

シナリオ版

## さとみの部屋

暗い室内、机の上には大量の督促状。おもむろに立ち上がって鏡を見つめる女性（さとみ）

さとみN 「私は、さとみ。都内の大学に通う女子大生」

その姿はタンクトップにショートパンツ。

さとみ 「……」

鬼神のように鋭い目のさとみ、その目には怒りと憎しみが宿っていて。

ふと、鏡の前のカミソリを見つめ、

さとみ 「……」

カミソリを手に取り、握りしめる。

さとみN 「私には、みんなに言えない秘密がある」

背後に雷鳴が轟く。

タイトル 『現代TOKYO怖話』

緊張した面持ちで待っているさとみ。

そこへ近づいてくる高橋。

高橋「お客様、改めまして担当の高橋です。よろしくお願ひします」

さとみ「あ、あの！」

高橋「……」

さとみ「広告って、本当なんですか？」

×

×

×

（フラッシュ）街中でポスターを見つめているさとみ。

【広告コピー】『自分の毛深さに人知れず悩んでいるアナタへ。今だけ！ 初めての方だけ！ 両ワキ&Vライン3年間1000円で通い放題！』

さとみ「……」

その恍惚とした表情。

× × ×

さとみ「……」

高橋「……あはははは！」

さとみ「？」

高橋「やだあ！ もちろん本当ですよ！ 初めての方限定！

3年間どれだけ通っても1000円！ ウチのサロンは地域

最安値ですし、変な勧誘とかありませんから、安心して

ください。あ、そうだ。お客様って、脱毛は初めてなん

ですよね！」

さとみ「え？」

満面の笑みを浮かべる高橋。

× × ×

高橋、さとみの腕にシェービングクリームを塗って

いる。

さとみ、その手元を不安げに見つめている。

高橋「……やっぱり……けっこう……アレなんですわね」

---

さとみ「ど、どういうことですか？」

高橋「これは確かに……かわいそうかもしれない……」

さとみ「……」

高橋は妖艶な手つきでシェービングし、ジェルを塗り、脱毛マシンを照射する。

さとみ「……」

× × ×

ローションを塗り、見事に生まれ変わった右腕。

その腕を見つめながら、希望に満ち溢れたさとみの表情。

高橋「どうですか？」

さとみ「スゴイです！ スゴイ！ もう凄すぎる！」

高橋「ずっとこのままだったと思うと、けっこうヤバイですよ  
ね」

さとみ「えっ……」

高橋「なんかもう、すごく同情するし、こっちも絶対頑張らなきゃって思います」

さとみ 「そんなに…」

×

×

×

高橋 「お客様の場合、通い放題の全身永久脱毛コースを、強く、

強く、強くお勧めしますけど」

さとみ 「え？ ワキとVラインで1000円じゃないんですか？」

高橋 「それは、永久脱毛コースをご契約頂いた方限定のサービ

スなんですよ」

さとみ 「それって…」

高橋 「ざっと100万くらいです」

さとみ 「そんなに!？」

高橋 「(明らかに不機嫌そうな顔で)チツ」

さとみ 「ちなみに、パーツごととか1回ずつとかは…」

高橋 「(不機嫌そうな顔で)まあ、脱毛って20回くらいやって

いただかないと、つるつるにならないんですよ」

さとみ 「いや、でも……」

と、高橋の方から顔を背け、

高橋 「(突然、嘘くさいキラキラした笑顔で) あ！ そうだ！

期間限定！初めての方限定の超お得なプランはいかがですか？ パーツを自由に選んでいただいて、2年間通い放題50万っていうコースなんですけど！ ただ、今日中に申し込んでいただかなくちゃいけないんですよ」

さとみ「今日中?! さすがにそれは…」

高橋「一括じゃなくても大丈夫ですよ。月々1万のリボ払いとかにすれば、毎月ワンピース一枚買うのと同じくらいだし」

さとみ「でも…」

高橋「脱毛は一生モノですよ？ 悩んでるのにほったらかしにするなんて、自分に負けてるみたいで辛いじゃないですか」

さとみ「……」

高橋「そうだ、このプランに申し込んでいただくとこんな特典もつくんですよ。毎月毎月お得なサービスがこんなに。」

ね、今だけのお得なプラン、今申し込まないと絶対に損！ 脱毛が人生を変えるんですよ、生まれ変わる、今が

そのチャンスなんです！」

延々とハイテンションでしゃべり続ける高橋。

どンドンと疲弊していく様子のさとみ…。

× × ×

疲れ果てた表情で押印するさとみ。

さとみ「……」

3  
夜の町中

ネオンがきらめく街を1人コツコツ歩くさとみ。

さとみN「これでいい。これでいいんだ。私は生まれ変わるんだ

……そう思っていた」

4  
さとみの部屋

電話をかけるさとみ。

さとみ「あ、もしもし？ 来月の予約をお願いしたいんですけど」



高橋の声「申し訳ございません。来月はすべてご予約でいっぱい

です」

さとみ「え？」

さとみN「次の月も、その次の月も…」

× × ×

さとみ「あ、もしもし？ 来月の予約を…」

高橋の声「申し訳ございません…またのご連絡お待ちしております

す」

× × ×

さとみ「あ、もしもし？ らいげつ…」

高橋の声「申し訳ござ…」

× × ×

さとみ「もしも…」

さとみ「(電話を切って) 通い放題、やり放題なんて全然嘘じゃ

ん！ だまされた！」

さとみの部屋

机の上には、大量の督促状たち。

さとみ N 「2年間で、通えたのはたったの3回だけだった」

布団にくるまっているさとみ。

ふと、鏡の前に並べられたカミソリが目に入り。

さとみ 「……」

黒い長袖の上着とフードを被ったさとみ。

さとみ 「……」

脱毛サロンが入居している雑居ビルの前で立ち止まる。脱毛サロンの「Beating You」の看板を見つめ、

さとみ 「……」

脱毛サロンに向かって歩き出すさとみ。

終